

講読希望の方は受付まで

浄土

monthly
JÔDO

1998 September

9



法然上人讃仰会・発行



テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ

日本テレコム

お申し込み、お問い合わせは
お客様センターへどうぞ



0088-82 (無料)

〔受付時間〕9:00~23:00 (年中無休)

〈インターネットホームページ〉<http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

国際電話は**0041**、市外電話は**0088**でテレコムしよう。

選擇寺

木更津

寺瑞鳳仁

寺に歴代あり
人々之信あり
日本の心故郷を思ふ人々

選擇寺本尊。秘仏の本尊は年に一回、十夜法要の時にだけ、開帳される



木更津 選擇寺



本堂の横に客殿が並ぶ。客殿は元幼稚園だった場所だという

木更津の新しい顔、東京湾アクアライン。川崎と木更津を結ぶ
 高速道路のパーキングエリアは
 祝日は観光客であふれかえる



木更津甚句の記念像。木更津船
 で栄えた頃、木更津芸者によつ
 て甚句が語られ、踊られた



選擇寺寺宝の寝釈迦像。等身大の一木造りでペルシャ模様が入っている珍しい仏像だ

木更津駅のターミナルわきにた
たずむ観音堂。選擇寺末寺だつ
た西光寺の跡地に立っている



木更津風物誌ともなっている選
擇寺のおえんま様のご縁日。そ
の主役（？）閻魔像は西光寺の
廃寺により選擇寺にやってきた



選擇寺第三十八世山本恭雄住職



撮影・タカオカ邦彦

浄土

1998/9月号 目次

カラーグラビア 寺院紀行「選擇寺」	写真＝タカオカ邦彦	3
今、教育に求められるもの	香川英雄	8
表紙は語る	川井 聡	16
選択集絵解き物語（最終回）	大室了皓	17
連載 選択集を拝む（三）	須藤隆仙	26
寺院紀行 木更津「選擇寺」	真山 剛	34
御法語に聴く	小村正孝	44
コラム 仏教歳時記		49
連載 身障者から学ぶ	高木悦男	50
連載 無明抄	秦 恒平	56
Jフォーラム		63
事務局便り		69
編集後記		70



表紙題字＝浄土門主 中村康隆 祝下
 表紙撮影＝川井 聡
 アートディレクション＝近藤十四郎
 協力＝迦陵頻伽舎

今、教育に 求められるもの

二十一世紀につなぐ
学校教育の指針



教育評論家

香川英雄

このテーマを聞いたとき、まず私の頭に浮かぶ人物は、イチロー選手、野茂選手、シンドグ牧師の三人です。この三人がいればキーワードと考えています。

イチロー選手、野茂選手は皆さんよく御存じのプロ野球のスーパースターです。シンドグ牧師は覚えていらっしゃるでしょう。一九二〇年インドで発見された、狼に育てられた二人の少女アマラとカマラを八年間育てた牧師さんです。

まず、イチロー選手と野茂選手からお話しましょう。この二人を取り上げたのは、二人のようにすべての子供がスーパースターを目指せということではまったくなく、この二人はむしろ一般の子供と比べ、変わっていると思われるからです。悪い言い方をすれば変わり者です。しかしこの二人を見ていて言えることは、人間がその人の力を一番発揮することができるのは、好きなこと、得意なことに打ち込むということです。

無気力の原因

私は小学校の教諭として三十数年子供達と接してきました。今一番感じますことは、希望がもてなく、やる気、意欲がなくなっている子供たちが増えていることだと思います。これはとても悲しいことです。

どうしてこんなことになったのでしょうか。やはり学校の問題が重要です。第一には、詰め込み教育による競争原理の仕組みです。テストに明け暮れ、生活態度までも点数主義、

偏差値でしばられるという現状です。私の時代、小学校ではよく市販のテスト、バラテストをやっていました。国語・算数・理科・社会の四教科で、一学期二十八〜三十枚です。それに先生自身のプリントテストがあるので、子供はたまりません。それにそれらのテストは全て減点法です。できたところを評価するのではなく、できないところをチェックし、何点足りないということだけを突きつける減点法なのです。これでは子供から夢や希望を失わせるに充分です。

広島大学の片岡徳男先生は「画一的な評価、狂信的な学歴信仰、こうしたものが子供を無気力、無関心にするばかりでなく、人間差別に駆り立てるところまで来ている」といふこと。つまり日本の教育の諸悪の根源は偏差値だ」とまでおっしゃっています。

第二は、管理、取り締まりです。すべて一律にそろえる画一化は、管理する側にだけ楽な教育です。人間は管理されることになれてしまうと、自分で考えること、自分自身に自信を持つことができなくなります。事実、平成七年から深谷昌志先生夫妻が調査した、世界の子供と日本の子供との比較では、日本の子供たちのほうがはるかに、知識量も豊富で知識理解も進んでいるにもかかわらず、自己評価、自分にはまだその力がないと認識する子供が大変多く、将来の希望を低く考えている子供が多いことに驚かされます。

第三は、似たように聞こえますが違いを排除する教育です。個性を認めない、多様性の排除は、物差しをひとつにしてしまうことです。全てにおいて平均点を取ることを求め、それを強要する教育です。人間、得手不得手があつて当然なのに、それを認めないと言わ

んばかりの教育です。あのイチロー選手にしろ、野茂選手にしろ個性的でしょう。イチロー選手の振り子打法、野茂選手のトルネード投法、どちらだって普通ではありません。でも、その個性を監督、コーチが認め、見守って育ててくれたから二人はスーパースターになったのです。私が尊敬している杉山正一先生は、「自己を育てる教育は、自分が自分で自分を育てる教育なんだ」とおっしゃっています。

今、求められるもの

イチロー選手はテレビのコマーシャルで「変わらなくちゃ」、そして「変わらなくちゃも変わらなくちゃ」とまで言っています。また、橋本前総理も自民党総裁になったときに『変革と創造』を旗印として掲げています。今教育に求められていることも、この変革なのだと思います。

それは教師、父母、子供も含めすべてのものが、「意識の変革」を迫られているのです。つまり、学校教育が今行っている、偏差値優先、詰め込み式教育を変えなくてはだめだと思ふのです。

教育の本質、原点とは何かを私なりに勉強している中で確信したことは、『一人一人の子供の力を引き出し、伸ばし、育てる』ことだということです。これは群馬の斎藤喜博先生もまったく同じことを言っています。

つまり今求められている教育は、第一に、子供のもっている力を発揮できるように環境作りをしてあげることであり、第二に、そうした子供の個性を尊重してあげて、見守ってあげることであり、第三には、子供自身の自己実現をそうした形でできるように応援してあげることだということです。

東京大学の名譽教授である竹内均先生は、『人生を最高に生きる私の方法』という本の中で、人間にとつての幸せは、「好きなこととして食べられて人様の役に立つこと」と言われています。好きなことがイコール生活の手段となり、それで収入が入り食事ができ生活を営むことができる。そしてそれがそのまま大勢の人々の喜びや力となって役に立っているという生活。まさにイチロー選手や野茂選手はその典型ではないでしょうか。

なにもイチロー選手や野茂選手のようなスーパースターにならなくて、農家の人々が野菜を作るのだって、靴屋さんが靴を造るのだって、会計士が帳簿を整理することだって、みんなその仕事が好きで、そのことに自分の力が一番発揮できるのだったら、それが最高ではないでしょうか。我々は、それぞれの子がそれぞれに夢や希望がもてるような環境作りを、まずするべきなのです。

「学び方教育」ということを勧めている団体があります。そのモットーは「百匹の魚を与えるよりも、一匹の魚の釣り方を教えよ」です。最近中教審は「生きる力」を強調し、総合的学習とか問題解決学習などという言葉で「自ら学び、考え、問題を解決する能力をつけよ」などとさまざまな提案をしています。しかしこれらのことは言葉の問題ではなく、

毎日の実践の問題のはずです。日常の実践の中でどうしているか、どう取り組んでいるか、ということをおは大事にしたいと思います。

「百論一つに止まる。これ正なり」という、法隆寺や東大寺の修復作業の棟梁をされた西岡常一さんが、棟梁仲間の間に口伝で伝わる言葉を紹介しています。止まるという言葉の上に一を乗つけてみて下さい。正になります。なるほどなのですが、言いえていることも真理だと思えます。たぐさんの考えや英知も、喧喧諤諤とやっているうちは価値がなく、ひとつの実践をもつて初めて生きてくることだということです。誰の言葉か忘れましたが「知ることは行うこと」という言葉が、私の忘れられない言葉のひとつになっています。

心といのちの大切さ

そこでもう一度、現代の教育の根源を探ってみますと、やはり問題となりますことは、「心の問題」だと思えます。いじめによる自殺、不登校、万引き、これらのことが高校生から中学生へ、そして小学生へ、幼稚園児へと低年齢化の激化が目立ちます。今、日本の子供の心は病んでいます。体よりも心が病気になるっています。それはいのちの大切さ、尊厳さに気づかない児童が増加していると、私は実感を持って今受け止めています。

何故病気になるってしまったのか、その原因を考えてみますと、第一は、子供たちが生きるうえでのかかり所、避難所を持っていないということではないでしょうか。学校も家庭も



子供たちの拠り所にも、気を休める場所にもなっていないのです。いわば西洋の教会のようなのではないということです。人間には心の拠り所であり、心を休める場所が絶対必要なのです。

第二は、学校や家庭でも原理が、すべて競争原理になっていて、常に比較され蹴落とされる生活、対教師、対父母、対社会人、対友人という人間関係からくるストレスが、心の病になっているということです。

第三は、社会の風潮が物やお金本意に流され、心が軽視されていることも大きな要因でしょう。最近学校教育でも道徳や生活指導を通じ盛んに言われてきてはいますが、まだまだ子供たちにはとどいてはいないようです。

これからの教育方針

私はこれからの教育として、二つの指針を示したいと思います。ひとつは「いのちと人生に関する教育」、もうひとつは「愛の教育」です。

「いのちと人生に関する教育」とは、まさに宗教的なものです。鮭の一生や感動的映画などから、生と死、人生の生きがい等を考えることが大切な教育だと思っています。

「愛の教育」としては、最初に紹介したシンク牧師の話が感動的です。狼に育てられた少女アマラとカマラを八年間、ご夫妻で懸命に人間になるよう育てた記録『狼に育てられ

た子」は、すべての人に人間とは何かについて考えさせてくれます。その中でシング牧師は「愛情こそ、この世界で奇跡を起こすことができる」と言っています。あるシスターの言葉ですが、「愛は心を受けると書きます」と言っています。また玉川大学の小宮路敏先生は、「子供を育てつつ学ぶことは許すこと、待つこと、祈ることであり、人生の最大の目標は、愛を学ぶことです」と言っています。私はこれからの教育にとって、この二つの指針は最優先課題であると考えています。

身体の病気を治すときにも、対処療法ではなく、身体に栄養を与え、力をつけることが大事であると同様に、心の病を治すに当たっても、心に栄養を与えることが一番であると考え実行しています。私が用いている心の栄養剤は、民話の語りです。ドイツの童話作家ノバリスの「童話はすべての人の魂のふるさと」という言葉に勇気づけられ、心温まる民話の語りを永く実践しています。理屈抜きに心の喜びや、やすらぎを感じられることが一番ではないでしょうか。

人様の心、子供の心を受け止められる人間でありたいと念じています。

(宮城県小、中学校教頭会総会講演より要録)

表紙は語る

車窓から

写真と文

川井 聡

9月

乗降客の途絶えた
駅には哀愁だけが残る
あるいは不意に
客車の窓の木枠から
懐かしい旅
の記憶がよみがえる
鉄路の果てに
彩いていくひとり
ひとりの人生

山陰本線 余部鉄橋

兵庫県 余部駅付近

日本国中高い鉄橋数あれど、その美しさと
印象の強さではこの余部鉄橋がかなりいい位
置をえるんじゃないでしょうか。海岸沿いの
谷間に架かり、列車が鉄橋をわたるときは、
橋全体が楽器になったかのように、重厚な音
楽を奏でます。橋を構成する鋼材は外国から
輸入され、陸路ではなく海路で陸揚げ。現場
で組み立てられました。その当時を彷彿とさ
せるかのように、現在も完成当時の美しさを
保っています。

夏、この鉄橋近くの海岸にも、海水浴をす
る人たちがやってきました。そこから見て、
この鉄橋はまるで、紺碧の空と海の間に架か
る天の懸け橋のように見えるのです。

かわい さとし 現在、国内の鉄道旅行ガイド制作のため、日本全国のローカル線と
温泉をめぐりながら取材中。自宅より取材先にいる方が長いらしい。

選択集十六章之図

正徳甲午季冬近州蒲生日野
高田敬輔題於平安旅寓

連載

その四・第十三～十六章

大室了皓

選択集絵解き物語

選択本願念仏集は難解な書物であるといわれる。

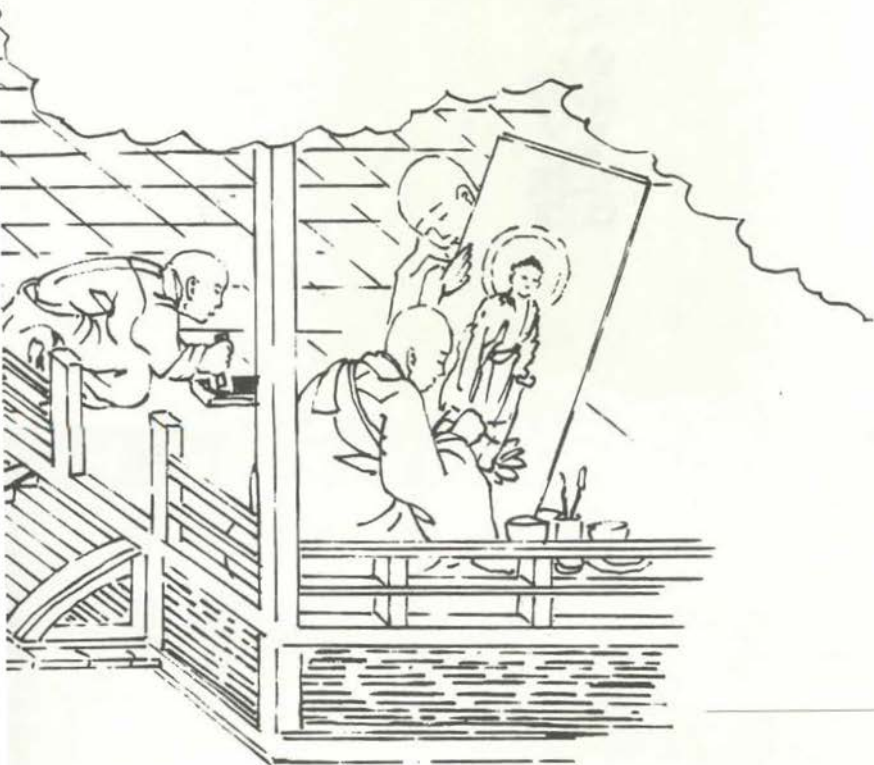
この絵解き選択集は

それをわかりやすく説明しようとしたもので、

古来より種々の流布がみられる。

ここでは正徳年間の十六章の図を取り上げてみた。

第十三章
念仏は最高の善である



この章では、念仏がもつとも勝れた善行であると言われています。

阿弥陀経には、

「わずかな善根功德では、浄土に往生することはできない。人々が阿弥陀仏について説かれるのを聞いて、たとい一日でも、二日、三日ないし七日でも名を称えて、一心にこれが続けるならば、その人が命終わる時、阿弥陀仏は浄土の多くの菩薩方と共に、その人の前に現れ給う。だからこの人は心の乱れや、悩みなく、ただちに浄土に往生することができ
る」

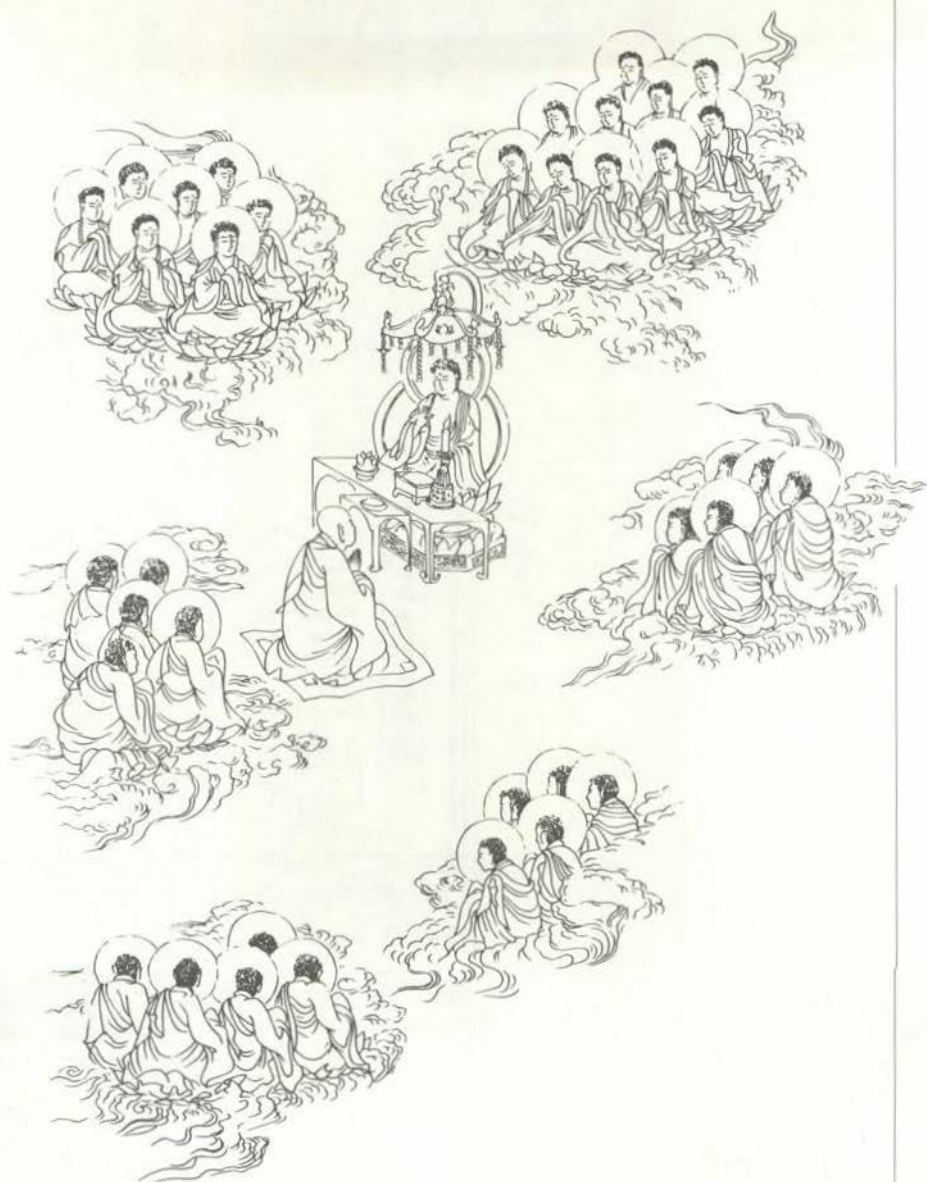
と説かれています。

この絵には、右に三人のお坊さんが力を合わせて、阿弥陀様の絵像を作っています。

きつと人々に最高の善であるお念仏を広めるためでしょう。

それらのお坊さんに教えられて、一人の信者がお名号に向かって一心に念仏を称えています。





第十四章

諸仏が証明される

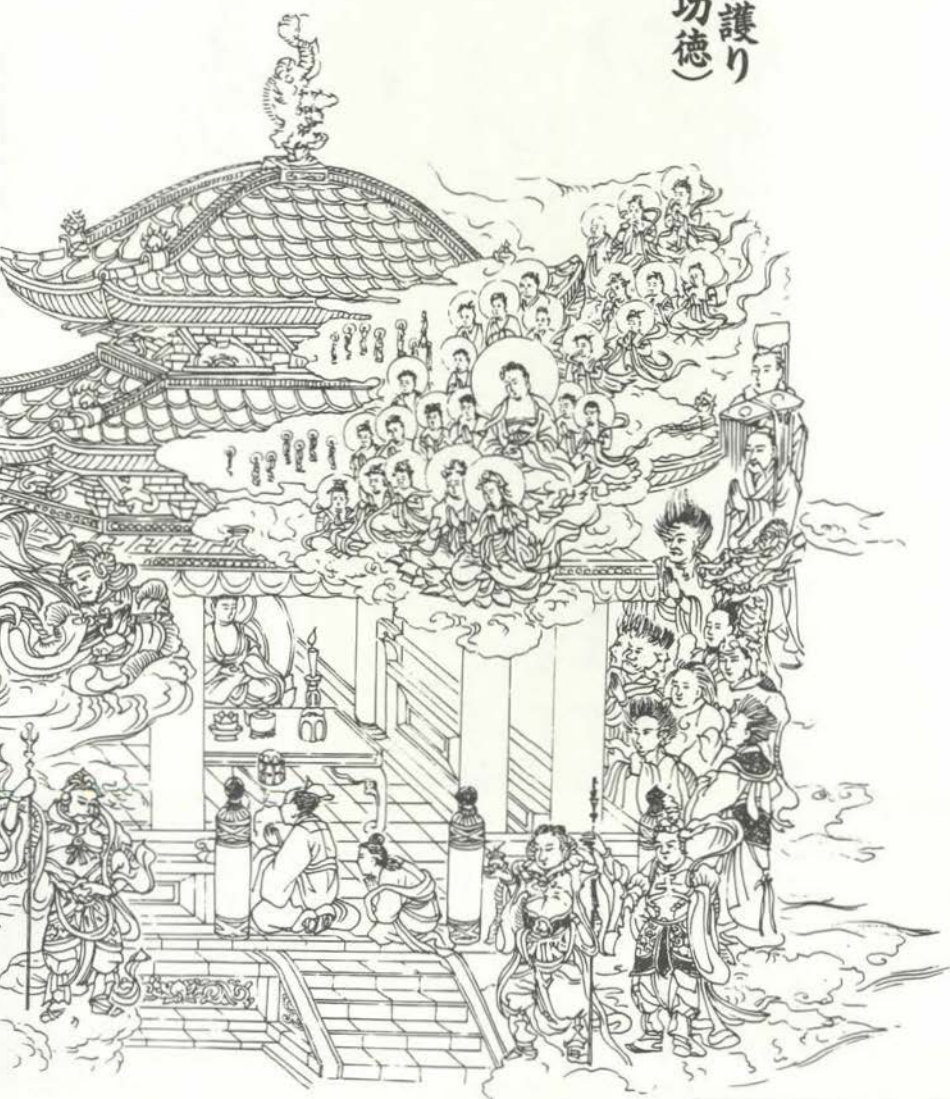
お念仏は、お釈迦様がおすすめになつたばかりでなく、六方においてのあらゆる仏様が、念仏往生のまことであることを証明して、罪の深いどんな人でも、心を浄土にふりむけ、お念仏を称えて往生を願ひ、命の終わる時まで、あるいは七日でも、一日でも、十声、一声でもみ名を称えれば、命終わる時には阿弥陀様は菩薩方と共に、親しくお迎えに来て下

さることは、真実であり、誤りはないとあかしをたてられたのです。

この絵には、中央にお釈迦様、その前にお念仏の教えを聞いているお弟子。その周りには六方（東・西南北・上方・下方）におられる沢山の仏様が描かれています。

これらの仏様が、こそつて証明されている様を表したものです。

第十五章
諸仏のお護り
(念仏の功德)



阿弥陀経には、お念仏を称える人は、六方の諸仏が守って下さる、と説かれています。ですから、このお経のことを「護念経」とも言います。

詳しく説明しますと、教えを信じてお念仏を称えるならば、阿弥陀様は二十五の菩薩方をお連れになって、この人をお護りになる。

菩薩方ばかりでなく、仏法守護の沢山の天神や四天王なども影の形に添うように、悲しみの心をもつて守って下さるから、昼でも夜でもあらゆる時、あらゆる所で悪魔悪神などはとても手を出す隙はありません。

ですから、長生きができ、禍は転じて福となり、身も心も安らかに過ごすことができます。

この絵をよくご覧下さい。

お堂の中でお念仏している人の右上方には、阿弥陀様や二十五の菩薩方が雲に乗って馳せ参じて来て下さっています。また左右には沢山の天神や四天王が護って、悪魔や悪神を寄

せつけないぞとガードしておられます。

左下には、驚いて逃げていく悪魔が描かれています。

よく見ると、仏様だけでなくガードする天神たちも雲に乗っています。ということはお念仏の声が聞こえたならば、即座にやって来て下さることを表しているのです。



第十六章

「南無阿弥陀仏」だけをねんごろに 舍利弗にお授けになった

この章は、選択集をおまじめになったものです。

この絵をよく見て下さい。真ん中におられるのはお釈迦様です。おん手を見るとお説法されていることが分かります。一段下がってかしこまってお説法を聞いているのは、十大弟子の一人である舍利弗です。

左右には共にお説法に聞きいつている多くの人が見えますね。その方々はみんな合掌していることから、一言も聞きもらさないという真剣な態度が伺えます。

お釈迦様は仰いました。

● 阿弥陀様は、多くの行の中から、お念仏だけを本願として、お選びになった。

● 他の行を捨て、念仏だけを選んで無上の功德と私は讃える。

● 念仏の教えだけを選んで、末法万年の後々までこれをとどめる。

● 阿弥陀様の慈悲の光は、念仏する人だけを照らして下さる。

● みを称えた人は、いかなる悪人でも、阿弥陀三尊が救いの姿を現し讃えて下さる。

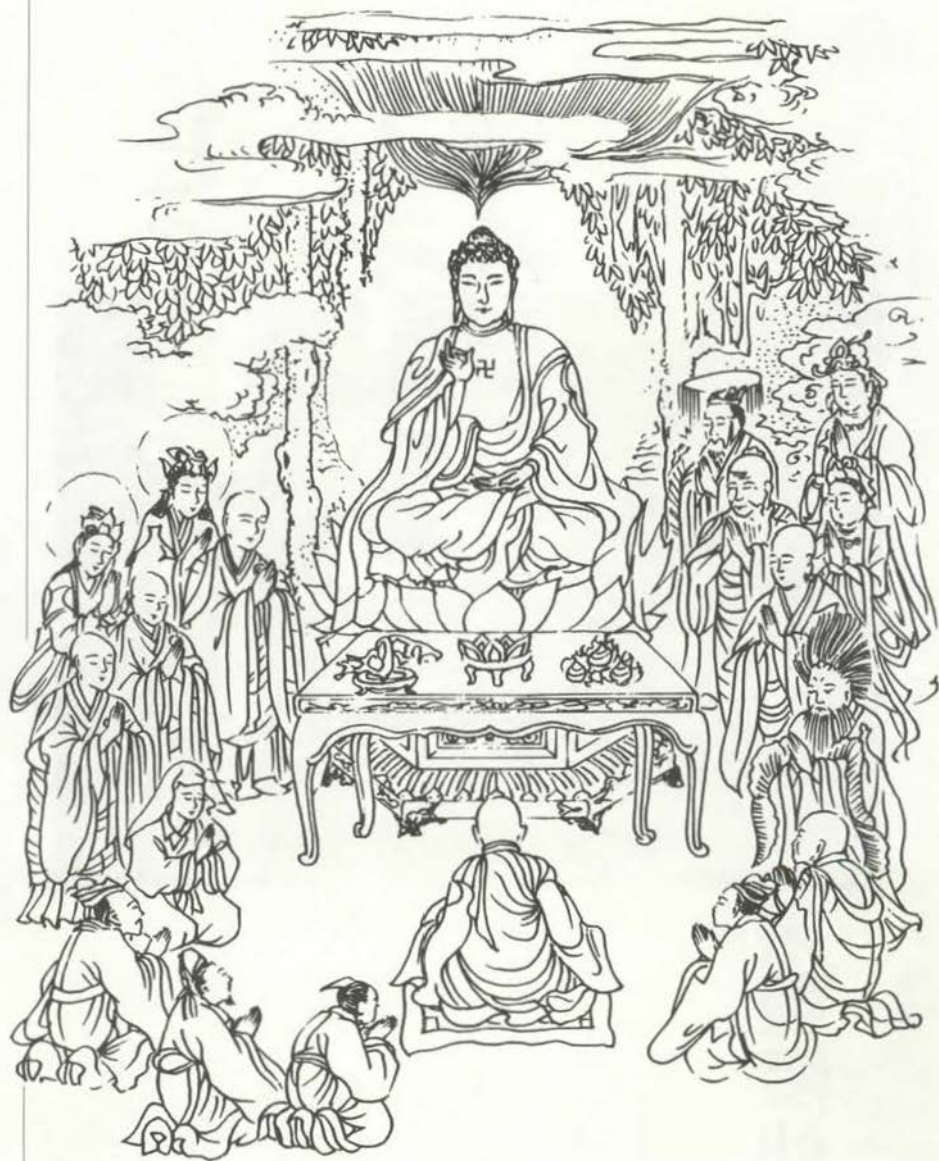
● 私は阿難に対して、阿弥陀様の名を後の世まで必ず伝えよと申し付けた。

● 六方の諸仏は、念仏だけが往生の行として真実であると証明された。

● 阿弥陀様は、浄土に生まれたいと願う者は、常にわが名を称えよと仰せられた。それを忘れてはならない。

人々は、以上のお説法にあらためて感動し、厳肅な雰囲気包まれている様子が描かれています。お釈迦様のきりつとされたおん目は、一大事を説いておられるように見えて特に印象的です。

おわり



連載

選拔集を
拝む
(三)

須藤隆仙

●易行ということ

阿弥陀仏の第十八願が何故に願生と称名とを内容とされたのかということについて元祖様は、仏様の御意であるから簡単には分かりませんとされながらも、試論として二つの理由を挙げられました。その一つは「勝・劣」で前回説明のとおりですが、二つ目は「難・易」ということです。称名念仏は易しいが、他の行は難しいので、それで阿弥陀仏は易しいほうをお選びになられたのだ、というのであります。私はこの条を拝するとき、元祖様の左のお言葉を思い出すのであります。

「極楽のあるじにておわします阿弥陀仏こそ、何事をも知らぬ罪人どもの、諸仏菩薩にも捨てられ、十方の浄土にも門をさされたる輩を、やすやすと助け救わんという願を發して、十方世界の衆生を來迎し給う」

（『禪勝房に示される御詞』）

同じようなお言葉に次のようにもあります。



「わが身罪重くて無知なれば、仏もいかにしてか救い給わんなど思わん者は、つやつや仏の願を知らざるもの也。かかる罪人どもを、やすやすと助け救わん料に、發し給える本願の名号を称えながら塵ばかりも疑う心はあるまじき也」（『十二問答』）

何という尊いお言葉でありましょうか。有難いお言葉でありましょうか。ここで「何事をも知らぬ罪人」「かかる罪人」とは、勿体なくも元祖様でご自身のことを仰せられておられるのであります。元祖様は他にも「十惡の法然房」「愚痴の法然房」とも仰せられておられます。何という深いご自省でありましょうか。「法然道理の聖」と称され、「智慧第一」「多聞広学」と讃えられた元祖様が、自らはこのように仰せられておられるのであります。

浄土門というのは、このような深い人間観の上に存立するものであります。易しい行、即ち易行とは、まさにこのような人間観の上に立つものでありましょう。

思うに、元祖様の宗教、法然上人の宗教というものは、人間凝視の宗教といつてよいのではないでしようか。石井教道博士はこれを機辺浄土教と名付けられたのであります（『選机集の研究・総論篇』）。機というのは機根きこんともいいまして、人間の資質、あるいは人間そのものをいうのであります。辺は岸とか側がわとかいった意味で、機辺浄土教とは「人間の側に立った浄土の教え」ということであります。元祖様は徹底した機微の真相に体当りなされて、浄土門をご発見になられたのであります。それが元祖様のご法語のいたるところに拝されるあの告白のお言葉であります。「我らはなにによって生死にはとどまれるぞと、はづべしはづべし、かなしむべしかなしむべし」（『三部経釈』）、「しらず地獄八熱の底にや住みけん。はづべしはづべし、かなしむべしかなしむべし」（『登山状』）、「わが如きは既に戒定慧かいじやうゑいの三学の器うけものにあらず」（『聖光房に示される御詞』）。こういった人間凝視こそ、法然



上人の宗教の特色であります。ここに必然的に「わが心に相応する法門ありや。わが身にたえたる修行やある」（『前同書』）との探求が始まり、そこに出てきたものが易しい行、即ち易行といわれるものでありましよう。

●時代は易行を求める

近刊書を読んでいて、おやツと思うことがよくあります。こういうことは八百年前の昔に元祖様がすでにおっしゃっておられることだと。

最近読んだ本でたいへん勉強になったものに、心理学博士生月誠著『心が強くなる心理学』があります。現代はストレスの時代といつてよいでしょう。このストレス時代を、疲れないで「いい一日一日」を送れることを教えるという本です。いろいろなことが書いてありますが、その第一章は「自分の中にある困ったブレーキ」を打ち壊せ」というのであります。そしてその項目が、「とりあえず今

一日に充実感があればいい」「自分で自分にブレーキをかけない」「漠然とした不安とスッパリ手を切る」「自分に不必要な荷物を背負い込まない」「ときには自分に甘くしていい」「相手の立場でものを考える習慣をつける」「心身の最高のバランスをつくる自律訓練法」などがあります。これはもう、元祖様の教えそのものであります。

今日一日の充実感とは、ただ今この時の充実感であります。一時一時が大切なのです。元祖様はそれを「南無阿弥陀仏とみて、南無阿弥陀仏とのめ」と教えられました。元祖様の教えを現代的意義に展開されて共生運動を起こされた椎尾弁匡先生は、「ときはいま、ところ足もとそのことに、打ちこむ命、とわのみ命」と詠んでおられます。充実とは文字通りへみち足りることであります。それを感じるということは、この私が感度のいい受信機になることであります。受信機ですから発信・送信を受けるのですが、私た



ちが充実を感知するために、発信・送信がなされているのです。どこからなされているかといえば、それは極楽からであります。世の中は諸行無常で、いつどう変り果てるかもはかり知れないが、阿弥陀如来様がちゃんと護っていて下さるぞ」という発信がつねにあるのです。堪え難い娑婆ではあるけれど、今現にこの私が生きている、ご飯を食べている、動いている、そう思ったときに、それはもう私の働きではない、護り護られての生活である、そういうことが分かってくるのです。「南無阿弥陀仏とみて、南無阿弥陀仏とのめ」とのご教示は、そのためであります。時は今現にこの一刻、場所は今自分がいるこの足もと、そこに生命をたぎらせていく、何も難しいことではない、たった今の、すぐその場所での生命の躍動、それが永遠の命の証なのだとの椎尾先生の御歌も、それを教えているわけがあります。

自分がブレーキをかけない、不安と手を切

る、不必要な荷を背負わない、ときには自分に甘く、などといったことは、元祖様の仏教、法然上人の仏教の根本教義であります。有名な次のお言葉がすぐ頭に浮びます。

「現世をすぐべき様は、念仏の申されん様にすぐべし。念仏の妨げになりぬべくば、なになりともよろずをいとい捨てて、これを止むべし。曰く。聖で申されずば、女(め)妻を設けて申すべし。妻を設けて申されずば、聖にて申すべし。住所にて申されずば、流行して申すべし。流行して申されずば、家にいて申すべし。自力の衣食にて申されずば、他人に助けられて申すべし。他人に助けられて申されずば、自力の衣食にて申すべし。一人して申されずば、同朋と共に申すべし。共行して申されずば、一人寛りいて申すべし」(『諸人勸化の御詞』)

相手の立場を考える、心身のバランスの訓練、などということも、「別解異学の人を見てあなづりそしる事候まじ」(『二位の禪尼へ進



ずる御返事」、「国王の身をうけて一天下をしただかうといえども、生老病死、愛別離苦、怨憎会苦、一事もまぬがる事なし」(『要義問答』)など、懇切なご教示です。

まさに元祖様の易行そのものののみ教えてあります。それは時代が下るほどに、易行でなければ仏教は成り立たない、という厳粛な事実でもありましょう。換言すれば、時代は易行を求めている、ということになると思うのであります。

●易行の系譜

いったい仏教に、いつ頃から易行という教えが出てきたのでありましょうか。これに関しては、以前本誌に『念仏信仰の系譜』を執筆いたしましたして、その平成五年九月号と十月号に「釈尊の出家に他力を見る」、「教団分裂と浄土教」との項目で述べたことがあるのですが、じつに釈尊時代にすでにその萌芽が見られるのであります。釈尊は周知のとおり、二

十九歳のとき、約束されていた王位を捨て、家族を捨てて出家されるのですが、それから苦行を続けられます。そして六年たつとその苦行を止められました。そのときのお言葉が、「低き苦行は何であろうと、何の益もない」「悟りに至るには他の道があるであろう」というのであります（中村元『ゴータマ・ブッダ』）。即ち、悟りのためには苦行は無益である、というのでした。

苦行を捨てた釈尊は、ナイランジャナー河（ニレンせんが）で身を清め、村娘の捧げた牛乳粥で体力を回復し、樹下に端座し静慮して、やがて開悟されるわけでありました。そのときの村娘の名をスジャータといひます。漢音写では須闍多です。「善生」という意味なのです。少し前に、コーヒーに入れるミルクがスジャータの名で盛んにテレビで宣伝されていましたが、おそらくこの故事からとった名でしょう。それはともかく、この、苦行を捨てられた、というところに、易行ということ

が見えてくるのであります。釈尊とても自力の苦行では悟ることができなかった、即ち苦行難行の限界ということが、ここで教えられているのではないのでしょうか。

釈尊滅後、仏教はさまざまな発展をみせていきます。その大きなものは、保守派と革新派との分裂でありましょう。その流れが上座仏教と大乘仏教というものになるわけです。分裂の原因は種々ありますが、「だいぜんごじ 大天の五事」と「じゅうじ 十事の非法」ということが伝えられております。釈尊滅後百年ばかりたった頃のことですが、教団に大天（梵名マハーデーバ）かだいば 阿提婆という僧がおりました。大変な罪惡の過去をもった人で、義母と通じて実父を殺して他地へ逃げ、そのことを知っていた僧をも殺す、という重罪の人でしたが、のち懺悔して仏門に入り、なかなかの学僧となって阿育王の帰依を受けるほどになったのでした。大変な体験の持ち主ですから、ものごとくに真っ正直に取り組み、決断していいかげんな妥協

を許さない厳しいリアリズムに立っており、仏教についても次のような五つの主張をしたのでした。

①悟りを開いたといっても、生身の体があるうちは無知の要素がある。

②悟った人でも夢精をすることがある。

③悟った人でも世間事では迷いや疑心をもつ。

④悟った人でも自分のことは気付かずにいることがある。

⑤悟った人でも過去の罪を苦痛に感じ、その感じ取りがないと悟りはない。

これが即ち「大天の五事」といわれるものであります。このために教団は大騒ぎになり、彼の主張に賛同する派(革新派)と、賛同しない派(保守派)とに分かれたものであります。さらにこの分裂を決定的にする「十事の非法」という次のような事件があったのでした。

跋闍子(梵名バツジプッタカ)という僧が、教団の戒律について十の主張をしたのでした。



①塩の貯蔵を許す。②午後の食事を許す。③食事の規制を緩和する。④同一地で懺悔会を別々に行なう。⑤会議のやり方を合理化する。⑥律文より前例を重んじる。⑦食後の飲み物を許す。⑧未発酵の酒を飲むことを許す。⑨へりのない坐具を許す。⑩金銀の貯蓄を許す。などてあります。今の私たちから見れば当り前の主張なのですが、これが大問題となりました。金銀の蓄えなども、欲張って蓄財するという意味ではなく、最低の生活を保持するための資金なのです。しかし、長老といわれるような保守派の僧たちはカンカンに怒り、絶対に認めるわけにはいかないと言い張りしました。そこで七百人の僧が集まって聖典を研究し直し(第二結集という)、右の十事を検討したのですが、長老たちはこれを非法と決めたのです。いわゆる「十事の非法」であります。しかし、これに賛成の僧もおりましたから、前の「大天の五事」とこの「十事の非法」とが動機原因となって、教団は大きく保守派

と革新派とに分裂してしまつたのであります。革新派の主張は、いわば「易行」の主張でありました。

この分裂があつて数百年の後（二―三世紀頃）、インドに大乘仏教の大成者といわれる龍樹菩薩が出現されます。「第二の釈尊」といわれ、「八宗の祖師」といわれたお方であります。この龍樹菩薩がまた、はつきりと「易行」ということを仰せられました。このお方も大天のように極楽体験のお方でありました。ですから難行だけではだめだ。易行という方法もあるのですと教えられ、難行を陸路の徒歩旅行に例えられ、易行を海路の乗船旅行に例えられたのでした。そしてその易行とは、仏語を信じて称名念仏することであると教えられたのであります（『十住毘婆沙論』）。ここに仏教義の上に易行ということが明瞭になつたのであります。



龍樹菩薩より三百年ばかり後に出られた世親菩薩（天親菩薩とも）は『無量寿経優婆塞含願生偈』というお書物を書かれ、これに作願（往生を願うこと）など五つの行を示されましたが、これも易行をお示しになられたものでした。この書は『往生論』とか『浄土論』とかいわれ、中国の曇鸞大師が註釈書を書かれましたが、難行を自力と名付け、易行を他力と名付けられたのでした。

道綽禪師はこの伝統を受け継がれて、難行道を聖道門とされ、易行道を浄土門とされたのであり、『選択集』にはその間の事情が懇切に述べられているのであります。ですから親鸞聖人はこれを、「見るもの論り易し」と感激されたのであります。

（つづく）

（法然上人讃仰会理事・函館／称名寺住職）

寺院紀行

木更津

選擇寺



文／真山剛
撮影／夕力才力邦彦

『出前の心が大切です。こちらが出ていかなければ、人は来てくれません』。

選擇寺第三十八世山本恭雄住職は、これからのお寺に求められるものはという質問に、そのひとつとして出前の心をあげられた。数年前に体調を崩され、本調子ではない中でインタビューだったが、この答えの時にはその大きな瞳がさらに見開かれた。山本住職にとってこの精神は長年の僧侶として育ててきた果実に違いない。

山本住職は昭和六年、東京品川生まれ。住宅街にある寺町の常光寺に次男として生まれ育った。

大正大学では史学を学び、縁あってこの木更津、選擇寺に養子として入られた。筆を執られる事が好きで、先代山本祿瑞師（昭和五十七年遷化）の頃から発行している選擇寺月報『浄心』（現在年四回）、さらに昭和四十八年一月から発信された『はがき通信』（毎月一日発行、昭和六十二年七月には『和して美し』、平成元年十月には『私たちのお寺 選擇寺』という小冊子も出されている。いずれも檀信徒向けの印刷物だが、どれも心の行き届いたものである。

それに加え、この『浄土』にも住職が執筆されている。昭和四十四年四月号で「降誕会によせて 花まつり徒然抄」と題して、東京山の手の寺での思いでを綴りながら健筆をふるわれている。

さらに驚いたのが先代の住職も執筆されていることだ。『浄土』の



本尊とともに江戸奥沢の九品仏から賜った韋駄天像。台所を富ませるといふ

昭和四十九年八月号に『わが懺悔』を執筆されている。

たまたまこの二冊を見せていただいたのだが、おそらく何度も『浄土』がお世話になってるに違いない。それに、編集部には残っていない昭和十年五月に発行された『浄土』創刊号が選擇寺に保存されていて、拝見させていただいた。『浄土』に関わる者の一人として大いに感激した。

さて、このように活字と縁の深い先代、そして現任職だが、先の『私たちのお寺 選擇寺』と『選擇寺歴代上人の事蹟——五百年の歩みの中で——』（山本楳瑞上人執筆 昭和五十六年発行）を参考に選擇寺の歴史を繙いてみよう。

浄土宗の総大本山というと、京都に知恩院を始め四カ寺、それに九州・久留米の善導寺、長野の善光寺大本願、東京、芝の増上寺、そして神奈川・鎌倉の光明寺だが、この光明寺の第九世観譽祐崇上人が選擇寺の開山である。

祐崇上人は光明寺の事実上の開山といわれるほか、全国に三十三もの寺を開いた僧侶で、浄土宗三部經のひとつ『阿弥陀經』を後土御門天皇に何度も講説するほどの学識者でもあった。さらに現在も浄土宗ならではの行事として行われる「十夜法要」を初めて厳修されたのもこの祐崇上人である。

その祐崇上人が上総布教のおり、夜を明かした西休庵で、松林か



福岡県福岡市の博多区にあるもつひとつ選擇寺

らの鶏の鳴き声を聞き、インドの仏教修行道場の鶏林精舎の故事を思い出し、寺の建立を思い立った。こうして鶏頭山西休院選擇寺が建立されたのである。ちなみに院号の西休は西国浄土に休む（涅槃のこと）から、そして寺号は『選擇本願念仏集』の選擇をとったものだ。

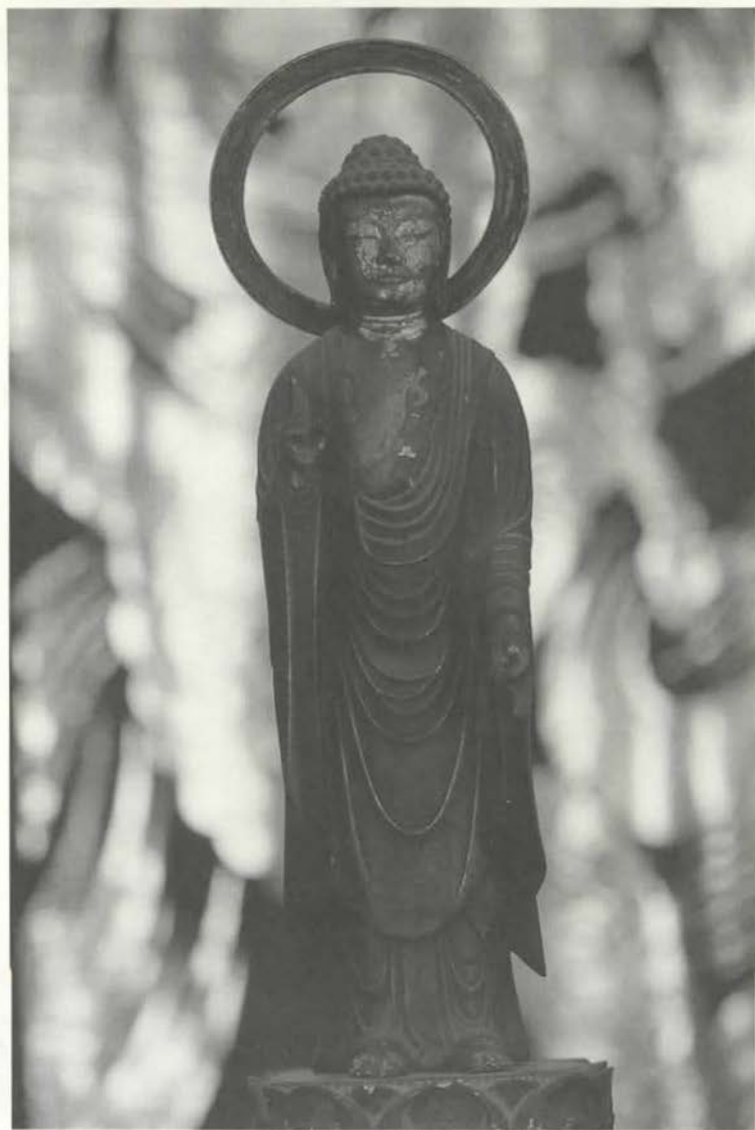
そう『選擇本願念仏集』は浄土宗の開祖法然上人が建久九年（一九八）に先の関白九条兼実の願いに応え、なぜ自らが念仏を選んだかを説いた本で、略して『選擇集』と呼ばれている。今年元日発行の『浄心』に「選取と選捨」という題で、選擇の意味が、そしてその選擇を寺の名にいただいていることを住職が書いている。

ちなみに全国に選擇寺は二カ寺しかなく、もうひとつは福岡市の呉服町にある。多くの寺の名は経文からとる中で、宗祖の書かれた書名からというのは珍しく、またそれだけに意味深いということだろう。そして今年平成十年（一九八九）がちょうど『選擇集』が書かれてから八百年にあたることは読者も周知のことだろう。

こうして享徳三年（一四五四）に開かれた選擇寺の基礎をかためたのが、第二世から第七世までの住職である。当時は鎌倉が政治、経済、文化の中心地で、その対岸に当たる木更津とも交流があった。続く第八世以後は、戦国の世に苦勞しながらも選擇寺の念仏の法灯を引き継いだ。他の浄土宗の寺院同様、江戸時代になってからは



野口雨情作の「しよしよ しよしよ
じ」で始まる狸ばやしのお寺、隠誠
寺。鬱蒼とした境内と歌碑



珍しい下品下生の阿弥陀立像。処刑場のあった西光寺にあった像ではないかと想像される

徳川家の護法によって選擇寺もさかえ、特に第十七代の龍雲和尚は京都大本山清浄華院法主となっている。

現在の本尊は第二十五世察道和尚ゆかりのお像だ。享保二年（一七一七）の大火「ドンドン火事」で全てが無に帰してしまつた選擇寺は第二十四世惠尊和尚によって再建された。そして享保七年、後継者となつた察道和尚が師にあたる江戸奥沢の九品仏の珂碩上人から賜つたものである。この本尊は秘仏として、現在は秋の十夜法要の時だけ開帳されている。今回は住職の特別の計らいで撮影をさせてもらった。巻頭の頁にそのお姿を現している。

さて、選擇寺には多くの寺宝、そして資料が残っている。

もう少し資料に残る歴代住職の横顔を見てみよう。

第三十一世巖瑞和尚は末寺西光寺の役となつていた刑場での罪人の教導、寺小屋などの教育事業に専心された。

第三十三世大禅和尚の時に江戸から明治へと改まった。同時に罪人処遇の仕事に官に移すことで西光寺も無役となり廃寺。徳川菩提寺の増上寺直末の選擇寺も冷遇されたのは言うまでもない。

第三十六世禅応和尚の時には西光寺（旧罪人処刑遺地）が鉄道の駅となつた。そして鐵道院（現JR）に譲渡して多額の収入を得た。そこで禅応和尚は伽藍の修理を行い、そしてアメリカに五年間遊学、帰国後の大正六年の台風、同十二年の関東大震災で倒壊した本堂を



選擇寺でもつとも古い墓石がこの金石文で、生前戒名を授かつた事が記されている



江戸歌舞伎「與話情浮名横断」で有名なこつもり安は実在の人物で山口禪蔵という。その墓が選擇寺にある

建て直そうとした。完成を前に遷化した禪応和尚^{だう}が、アメリカで見て来た耐震耐火の鉄筋コンクリート造りを発案し、現在に残る本堂を建立した。その完成を見たのが先代三十七世住職である。

先代住職は昭和二十九年に幼稚園を開園（平成二年閉園）、昭和三十九年にはボーイスカウトを発団している。現住職が幼児教育に大変力を入れているように、教育への思いは並々ならぬようだった。

さて、選擇寺のある木更津だが、その地名の由来からして幾つもあり、なかなか魅力的な町である。内房のほぼ中央にある木更津は昔からの海上交通の要路で、鎌倉時代の頃は三浦半島との行き来の地であった。が、最も栄えたのは木更津船と呼ばれ、当時としては珍しく旅客を運べる船を江戸幕府から許されてからである。幕府認可となったのにはもちろん訳がある。大阪夏の陣に徴発された木更津の水主二十四人が大いに活躍したが、半数の十二人が戦死した。生存者が戦死者の妻子が生活に困っているのを訴えたところ、幕府がいくつかの特権を木更津に与え、お江戸日本橋の一等地に木更津船専用の河岸（港）まで与えたという訳だ。

木更津を治めた藩は貝淵藩、請西藩、桜井藩と続くが、もともと一番大きな請西藩も一万石で、廃藩まで十八年だった。だが、官軍に挑んだ青年藩士、林忠崇を輩出している。

また千葉蓮池とならび芸者で有名なのがこの木更津だ。元カーフ



中の島大橋から望む木更津港。昔から木更津は房総半島の出入り口として栄えていた

選擇寺第三十八世山本恭雄住職（手前）
と山本恵司副住職



選擇寺本堂は昭和六年に当時としては大
変めずらしかった鉄筋コンクリートで建
てられ、一番高い建造物だったという

エリー乗り場近くの海岸の公園に立てられている木更津甚句を踊る芸者さんの像が往時を偲ばせる。そして去年の東京湾アクアライン（木更津と川崎を結ぶ東京湾横断道路）開通。書き出すときりがないほどのエピソードがここ木更津にはある。

そうした木更津の町を代表する名刹、選擇寺は念佛の発信基地として、地元にもいつも情報を送り続けている。

冒頭の住職の出前の心という言葉にどんな意味が込められているのか、単なるサービス精神や積極性だけでない信念がそこに込められている。そしてこの信念を一番良く知っているのは住職ではなく、選擇寺檀信徒の皆さんに違いない。

（ルポライター）



保存されていた『浄土』創刊号。昭和十年五月一日発行

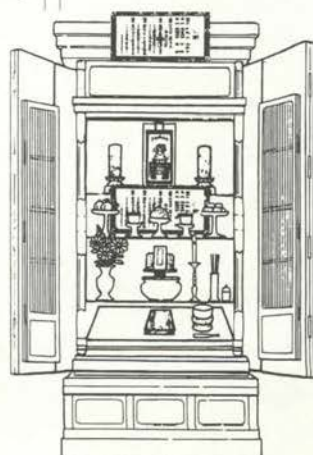
好評
発売中
!!

お寺から檀信徒へ

宗旨布教額

家の仏壇の上に掛けるものです。
菩提寺とその宗旨がいつも
ひと目で明確になります。

数をまとめて御注文下さい。



定価：大（32.0×18.3cm）735円／小（27.3×14.2cm）420円

注文・問合せは
法然上人鑽仰会

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内

電話：03-3578-6947／FAX：03-3578-7036

御法語に聴く

しょうどうもん

聖道門の修行は智慧をきわめて生死をはなれ

しょうじ

浄土門の修行は愚癡にかえりて極楽にうまる

【信空上人伝説の詞・昭法全六七二】

聖道門の修行とは、この世において智慧をきわめて生死を繰り返す迷いの世界を離れようとするものであり、浄土門の修行とは、罪深く、ものの道理に暗い愚かな自分であることをよく省み、お念仏を称えて極楽浄土に往生しようというものです。

悩めるままに

「いいなあ、子供は無邪気で悩みがなくて」

幼い頃、こんなことを言われた覚えのある人は少なくないと思う。そしてまた、大人となった今、一度や二度口にした経験も、やはり誰でも持ち合わせているに違いない。かく言う小生も、まだ乳飲み子であるわが子の微笑む表情を見てると、言葉に出さずともそう思えてならない。「それに引き換え、大人はどうだ、自分はどうか……」

悩み。

かつて地球上のあらゆる物、資源が無尽蔵であるかの如く錯覚されていた時代が過ぎ、有限であることあらためて認識されてその大切さが特に叫ばれている今日にあっても、この「悩み」というものだけはどうかやらないで無尽蔵らしい。どんなに科学が発達しようが、これだけは無くすることは出来ないだろうし、使いきってしまうことも出来なからう。

冒頭の言葉と矛盾するようだが、悩みなどなからうと映る子供にだって、それはあるに違いない。まだ言葉を話せない幼子。意思を伝える手段は泣くことだけ。お腹が空いてミルクを欲しがっているのか、おむつ

が濡れて不快なのか、眠くなってきたのか……。単なる本能的欲求の誇示なのかもしれないが、やはりそれも、空腹という悩みであり、不快という悩みであり、また疲労、眠気という悩みと言えなくもない。ただ、悩みとして受け止めることがまだ出来ないだけである。そう、きっと、悩みなのである。

当然のことだ。「生きている」のだから。

最近、通勤の行き帰り、電車に乗っていてこんなことを考えるようになった。

「このサラリーマンとおぼしき人は、今日、どんな仕事をするのだろう。そのことで何か問題を抱えているかもしれない」

「このおじさんにも家庭があるのだろう。子供の進学や就職のことで頭を悩ませているかも……」

余計なお世話だと言われてしまえばそれまでだが、厳しい表情で考え込む人、何に疲れ果てたのか眠り入っている人、必至に英単語を暗記している学生、いや、楽しそうに旅行雑誌を読んでいるOL、ほろ酔い気

分のお父さんも、それぞれに何かしら悩んでいるに違いない。そう思うとき、見ず知らずの人であっても、何か大いなる共通点で結ばれているような、そんな気にもなるのである。

悩みの種類、かたちは人さままである。安易に「そんなの悩みのうちに入らないよ」などと言ってはならないし、また言われたくもない。問題はこの自分にとってどうかという一点にあるはずだ。「悩みの根源は煩惱にあり」。確かに仏教ではそう教える。そして「悩みを断つためには煩惱を断て」とも。

聖道門が掲げた「断煩惱」という理想の旗を眺めているのではなく、大いなる共通点で結ばれた人間の現実の相すがたから目をそらすことなく直視したのが、そう、法然上人だった。

上人が提唱した、自らの機をはからつての「還愚の念仏」。「還愚」するとしてそうそう出来ることではないが、「還愚の念仏」こそは悩みに明け暮れながら生きていかざるを得ないこの世での智慧、処世法と、そう言うては上人に戒められるであろうか。皆が悩める者であるという現実とは、

「還愚」に、そして念仏にたどりつかざるを得ないことの証でもある。

悩み。苦しみ。その現実相。いかんともしがたいその事実を、まず素直に受け入れることが求められるのはわかつている。わかつてはいるが、それは決して容易なことではない。が、「互いに悩める者同志」という、その認識のなかに「還愚」とはどういうことかというヒントがあるようにも思える。

この自分も、これからもつともつと、それこそ我を忘れて号泣せざるを得ないほどに、周りが目に入らないほどに悩み苦しむ、そんな状況になることもあるだろう。しかし、我々の歩む道には「還愚の念仏」という究極の標が立てられている。

そんなに溜め息ばかりをついている必要は、どうやらなさそうである。

（小村正孝）

記 時 歳 教 仏

歳時記では秋は八月一週あたりから十一月一週あたりまで、

つまり立秋から立冬の前日までと決められています。けれど本

当に秋の実感がするのには孟欄盆会明け、というより九月に入っ

てからでしょうね。

残暑のきびしい季節。

朝夕がどかたよろしき残暑かな

青畝

いやな季節もこんな風に楽しんでしまふことができるのです

ね。俳句の面白さのひとつが感じられます。

初秋の蝗つかめば柔らかき

龍之介

珍しい芥川龍之介の句です。

文人俳句というべき範疇があるのですが、有名な「ペンキ塗

り立て」の青蛙の句といい、この蝗といい小さい発見に凝って

いるところが好感が持てます

残暑に対して新涼という季語があります、この頃になると

秋彼岸

身も心も秋に入りますね。

新涼や白きてのひらあしのうら

茅舎

そして秋のお彼岸がやってきます。暑さ寒さも彼岸まで。と

ころで俳句では単に「彼岸」と

いえば春の彼岸を指すようで、

秋は秋彼岸といわなければなりません。

くつろぎて僧も懐旧秋彼岸

定弘 衛

坂野泰巨 編 選 択 集 入 門

選 択 集 十 六 章 之 図

本書は『選択集』の各章を絵図におこした「選択集十六章之図」(高田敬輔・画)と、各章を適切かつ端的な言葉で解説した堀尾貫務上人による『選択集十六章図略解』の要文を左右の見開きページに配し、『選択集』の大意を知る最良の入門書である。

B5判・上製・本文五六頁(二色刷)・定価 四千円(税込)

株式会社文化書院

千代田区飯田橋4-5-4

102-0072

TEL. 03-3261-0480

FAX. 03-3261-0480

身障者から学ぶ

連載第三回

不安を 乗り越えて



高木悦男

乙武親子は桜の花に迎えられ、Y小学校の門をくぐった。待ちに待った洋匡君ひろなの入学の日である。感激の中にも不安がいっぱいというのが両親の率直な心境であろう。受付をすませて子供は教室に、親は入学式の間行われる体育館に案内された。

小学校の入学式は、地元の有志や元学校長などの臨席を仰いで行われるのが普通であるが、この年の入学式には、区の教育委員会から、教育部長、学務課長をはじめ六名もの方々が出席して行われた。

そして式の中で教育部長によって、乙武君が小学校に入ることになったいきさつやこれからのお願いなどが詳しく語られた。乙武親子の人間的魅力が、ここまでの区教育委員会を動かしたのである。前代未聞のことと思われる。

入学式後、クラスごとに親子全員で記念撮影が行われた。私は気づかなかったが、乙武君の隣に座ったA子は、乙武君のことがよほ

ど気持ち悪く感じてしまったようで、乙武君からなるべく離れようと、身体を斜めにして写真に写ってしまった。

次の日、学務課長が役所に出勤すると、A子の母親が待っていて、

「うちの子は、入学式から帰ると『気持ち悪い』と言って何も口にしません」

と訴えた。学務課長は、「申し訳ない」と答え、早速Y小学校長に電話した。

「児童の母親からの申し出があるので、座席を変えてもらえないか」

しかし、校長はこのことを握りつぶしてしまったので、私のところまで届かなかった。その理由は定かではないが、校長は、自分のところか、担任に申し出るのが筋であり、母親から直接話がない以上取り上げる必要はないと判断したと推察される。

私がこのことを知ったのは、五月の末に家庭訪問をして、直接その母親に会ったときである。しかしそのとき母親は、

「あのときあんなことを言ってしまったが、二、三日したら元のように元気になりました。区の教育委員会まで行って大騒ぎした自分が恥ずかしいです」

と話してくれた。その後そのA子は、乙武君の世話を本当に良くしてくれた。

入学後間もなくして、児童代表委員会によって恒例の一年生歓迎会が行われた。例年だと歓迎会の中で行われるクイズで、「○」と思う人は立って下さい」と言うのに、今年は、「○」と思う人はうなづいて下さい」という提案が六年生から出された。

担当のK教師は、「うなづくぐらいでは○か×かの意思表示がはっきりしないじゃないか、どうしてなの」と注意すると、「今年の一年生の中に手足のない子がいるでしょう。だからこう考えた」と理由を説明した。そして六年生の提案通りにクイズは行われた。

さて、乙武君は一日一日と友達が増えていて多くの友達と遊ぶようになった。ある日

休み時間が終わって、「ああ、楽しかった」と、教室に戻ってきた。どんなふうに遊んでいるのだろうかと思い、明くる日そっと休み時間に見に行くと、男の子たちは多勢で、野球のピッチャーが柔らかなボールを転がし、それを手で打って走る通称ハンドベースをみんなやっていった。その中に乙武君もいて楽しそうである。よく見ていると、その遊びの中に乙武君ルールがちゃんとあって、乙武君はボールを足で打ち、打つと代走者が走るようになっていた。さらに乙武君のための「ホームランゾーン」まで設けてある。一年生が乙武君を仲間に入れて遊ぶために、こんな発想までできるのかと驚いてしまった。

子供の心の中には育つ過程で、親、教師、友達などからいろいろな種がまかれていて考える。それらの種は多くの場合、問題解決のときに発想とか発案という形で芽をふくのではないだろうか。先の代表委員会における六年生の発案、一年生の乙武君と一緒に遊ぶ

ための発想は、問題を解決するための方途である。本来学校教育においてこの問題解決の場を与えるのは教師であるが、Y小学校に乙武君が入学したことが、子供たちに問題解決の多くの場を与えたことになった。

五月の末に運動会が行われた。運動会はその学校の関係者、家族が見に来るのが通常であるが、誰でもが見学できるオープンのある。したがって極端な言い方をすれば、「乙武君」という四肢欠損児を一般の人に公開してしまう場ともなってしまう。区の教育委員会、学校長もその反応がどういう形で出てくるか心配であった。当日は区の教育委員会からは学務課長をはじめ数人の方が来ていたし、学校長もいささか緊張気味であった。

運動会で一年生が演じる種目は、リズム、玉入れ、徒競走の三種目であった。徒競走は個人種目であり、学校長と相談の上不参加にした。「あまりにも差がつく惨めさをあじあわ



せたくない」という考えからである。リズムは皆指に花をつけて踊った。乙武君にも手の先に花をつけてやる。練習のとき以上にニコニコして踊った。一年生が踊り始めると場内が静かになり、乙武君の踊る様子に観衆は釘づけになってしまったようだ。あとで聞くと乙武君のいじらしい姿に、敬老席ではハンカチで目をぬぐう姿が見られたそうである。

乙武君の一所懸命踊る姿に誰もが感嘆し、心配することは起こらなかったが、その姿にカメラを向ける人が多くいたことは気になることだった。

乙武君の母親は、区の教育委員会との約束で、地震火事などの災害が起きたときのことを考え、常に廊下で待機していることになっていた。そして休み時間は運動場の遠くの陰から見守っていた。あくまでも安全確保のためである。

多勢の子供たちの中には、座ったままいざり歩いたり、手を袖の中に入れて走ったり

して、乙武君のまねをする子もいたが、母親はニコニコして何も言わなかった。

ある時隣のクラスの子が乙武君を囲んで、

「おい、どうして手がらないんだよ」

「病気だもん」

「病気なら医者に行けばいいだろう」

などという会話が あった。母親はそばで聞いていたが何も言わない。あとで話を聞くと、

「私が出てゆく時は洋匡に危険が生じたときだけです。その他は洋匡自身が自分で解決すべき問題です」

と言い、けじめをしつかり持っているその姿に感心した。

子供が少なくなっている今日、子供どうしの言い争いにもすぐに親が口を出すことが多く、子供たちの中に、親が何とかしてくれろという依頼心ばかりが強くなっているというのが現状で、子供どうしで問題を解決することができなくなってしまうている。このように突き放しながら、遠くから見守るという親

の姿勢が、今日強く求められているのではないだろうか。

私が乙武君を担当して一番気をつけたのは、乙武君の入学による他の子供へのマイナス面を、極力抑えることである。

「うしろに行つて、ロッカーからおはじきを持ってきなさい」と指示したときのことであつた。

みんなは一斉に取りに行つた。道具箱のふたを開け、さらに算数セットの中からおはじきを取り出して、座席に戻る。乙武君はどうしても時間がかつた。他の全員の子供たちを乙武君ひとりのために待たすわけにゆかず、授業をすすめた。すると乙武君がワツと泣き出した。「男の子が泣くのではない」と叱つて授業をすすめる。乙武君は泣きじやくりながら授業についてきた。

授業が終わつて、乙武君にはロッカーを二人分与えて、道具箱を開いたままにし、すぐに取り出せるように中味を器と蓋に分散させ

た。

乙武君を担当して毎日の指導は、このように試行錯誤しながらことを運ぶことしかなかった。その時々には悲しい思いもさせたが、あとで何らかのホローをしなからの日々であつたといつても過言ではない。

特に体育の時間のすすめ方、水泳指導はどのようにすすめたらいかわからず、私自身が身障者に対する水泳指導の勉強を受けて対応するという、私自身にとつても勉強する良い機会にもなつた。

しかし、何と言つても乙武君自身が楽しそうに学校生活を送っていることが、私の何よりもの励みであつた。

(元公立小学校教師)

連載

無明抄

どう
死ぬか

秦
恒平

5

武士道とは死ぬることと耳に聞き覚えたと、えらいことだと思った。従容として死ぬ人たちがいたと知れば知るほど、えらいことだと思った。辞世の和歌などよんで腹を切った人のことをたくさん聴いたり読んだりすると、いよいよ、えらいことだと思った。覚悟が決まっているというのは、そういうふうにならぬことかと思うにつけ、本当にこれはえらいことだと思った。えらいことになった、というのでは、ない。生まれて来たということとは、必ず死ぬ時を持ってしまったわけだから、回避できないのだ。出来そうにないなあと嘆息したのである。

死を回避したいと願った人の、じつは多かった証拠に、不老不死の薬が執拗に求められた。医学も薬学も発達した。保健と衛生とにかかわるあらゆる努力と願望も、ないし特殊な迷信や習俗もそれと無縁ではない。だが、せいぜい延命を得ただけ、死が回避できるわけがなく、世の中に「絶対」ということなど無いとしたり顔をする人がいても、生きとし生ける存在が必ず「死ぬ」のは絶対だと言わねばならない。

それでも、どうあっても絶対でないかのように、いろんなことを言う人も、大勢人類の歴史には現れた。「往生」もその一つだが、世俗でも、「みまかる」「隠れる」「逝く」「帰らぬ人となる」「お国替え」「神去る」などと、「死ぬ」とは言わぬように言わぬようにしてきた。「しぬ」とは「しなびる」「しおれる」意味から来ているとも教わった。とにかく忌避して当面のがれていきたいのが、「死ぬ」ことであつた。

もつとも、よろこんで死ぬ者も、皆無ではなかった。キシタンに大弾圧を加え、言う

に耐えない拷問を重ねて大勢を虐殺したことでは、桃山時代から江戸初期へかけての日本は、世界中のキリスト教徒を震えあがらせていた。だが多くのキリシタンが「殉教」の死を必ずしも厭わなかったし、進んで死のうとする者が跡絶えなかった。弾圧で踏み込まれた会堂で、十数人が次々に名を呼ばれ、捕吏の手に捕えられた、が、中に一人、幸か不幸か不在だった。すると、たまたま同じ名前の囚われる予定でなかったキリシタンが、自分を代わりにと名乗り出て、そして殺された。あまり自若として進んで天国に召されようとする信徒が多く、それを見ている市民たちが敬虔や感動を覚えては逆効果になると、苦慮した当局は、殺さずに転ばせる工夫をしたという。死ぬ喜びを与えないで、苦しめる拷問で信仰を捨てさせる方へ、責めの手口を狡猾に切り替えたのだ。

厭離穢土・欣求浄土。天国へ召されたいと切望したキリシタンも、つまりはそれであった。そういう死の享受は、仏教やその周辺にもあった。補陀落渡海死や日想観のまま海にむかって入水死する者が大勢いた。生きながら入定死する者もいた。集団自殺に嵌まり込んで行く信仰者たちが、途絶えること無く、忘れた頃にはまた必ず話題になる。

わたしのような男でも、死が「一瞬の好機」であるならば……と願っていなくもない。

沙石集であつたろうか。高德の僧が草庵に住まいしていたが、背後の崖が崩れ落ちて生き埋めになったのを、かつがつ助け出された。ところが浮かぬ顔をしている。なぜかと人が問うた。

あのとき、咄嗟に自分は観世音菩薩の名を呼んでしまった、さてこそ救い出された。あ

の時、なぜ南無阿弥陀仏と唱えて、西方浄土を願わなかったかと思うと悔やまれてならぬと、その、えらい僧は泣いたのである。印象によく残っている。一瞬の好機を、とらえ損じた話としてわたしは読んだ。誠実な信仰者の理屈では、「死ぬ」のと「往生」とは一続きであれども、咄嗟の感情ないし心理では「死ぬ」のと「往生」とはべつことであつた。死にたくない気持ちが生より現世利益の観世音菩薩に思わず縋らせた、と、説話の芯の問題はそこにあつたろう。或る意味で健康な心理であり、死のう死のうとする人間を死へと励ますような宗教であつてよろしいのかと、健康な人間ならそう思う。そう考える。良くとも悪くならずとも強いまいが、せめて生きよと促す力であつて欲しいと考える。

穢土であるらしき現世を、そうではないと高らかに否定できる幸福な人もいる。いた方がいい、そういう人ばかりならつまり穢土は無いのだから嬉しい。だが、やはり穢土としか思いにくい、苛酷で醜惡な現実にわれわれは^い圍繞されている。いや、被害者のような言い方はしてはならない、自分自身もその醜や惡の^い源泉として生きていて、だから穢土は免れえないし浄土を渴望することにも救済の意義はある。

これが、地獄と極楽という対照でプレッシャーがかかってくると、話はちがう。

地獄の苦で凡俗の心にきつい「条件づけ」をしてくる宗教には、むごいものを感じる。

幼い日々、地獄絵を見せられ、今日は地獄の釜の蓋があく日だと教えられ、考えようによれば、あれほど残酷で過酷なことが他にあつたかと思う。アウシユピッツも広島長崎も許せぬ残酷であつた。犯罪であつた。だが人類の久しい歴史のなかで、無慮無数の真つ白

であつた魂に「地獄」という幻想を、真実といつわつて接種し強要した行為は、甚だしく慈悲に悖るものではなかったか。

地獄のような「条件づけ」で何がほんとうに教導できたであろう。あらゆる「条件づけ」から真に人間を自在の境地へ、安心安堵の平和な境地へ、無とか空とかを体得しそこへ溶融して行くところまで導いて行くのが、もつとも本質的に喜ばしき信仰であらう。神も仏も無い、だから神とも仏ともいえるような境地、無心にして空の空のような「無条件」の境地、穢土も浄土もない、地獄も極楽ももとより在らうわけもない「無条件」の境涯。

ひとたび地獄苦について「条件づけ」られ、それゆえに死や死後に極度の怯えを吹き込まれた凡俗が、「無条件」の自在に至らうとするには、一度染み付いた恐怖を徹して洗い落とすという大仕事を経過しなくてはならない。地獄に怯えさせて置いて、「善」へと「条件づけ」出来るなどと思うのは、二重の傲慢ではなかったらうか。信仰は「条件づけ」をして人性を操るものであっていいとは思われない。「無条件」の全体トータルを自在に生き、安らかに死んで行けるように導くのでなければ、わたしなどは、むしろ信仰も宗教も無いほうが慈悲だと思っている。

往生要集を読んだとき、こんなに鮮明に地獄の像を与えてしまつて、その恐怖の代わりに何を人に与え得たのかと、怪訝に感じた。地獄の苦と相対化されている極楽のすすめでは、本当のところ地獄と変わりのない同じ地平に存在するにすぎない。真実の安心とは言えない。大事なのは安心して死ねることであり、そのために極楽すら必要ではなく、まし

て地獄で脅すことに何の意義があらうか。真実の信仰者であればあるほど、極楽の真実在をすら信じてはいないと思う。地獄の実在も信じていないと思う。実在するのは「死ぬ」という転帰であり、その際の安心のために多くが語られ、じつは無用のことが語られ過ぎしてきた。仏の名にかりてあまりに人を脅し縛りつけ「条件づけ」て善行とやらを強いてきた。強いられ「条件づけ」られてする善行でも、善行は善行だというのは理屈に以て屁理屈だと思う。あやつられてしているに過ぎない、人の行為としてそれは上等なものだとは思われない。

ショックを与えて支配するやり方は、恐怖による政治と同じで、人間を、たんに反応する機械のように「習慣」そのものに置き換える。良いことも悪いことも習慣で、「条件づけ」てやってしまう存在は、人間でなく機械になっている。それにもかかわらず、地上に現れた宗教の多くが地獄を説いて来た。言うまでもなくトリックであった。はつきり言って極楽もまたこの手のトリックであらう。それとも、そうではないと浄土宗や真宗のお坊さんは心から信じられているのであらうか。法然さんや親鸞さんは信じておられたらうか。

大胆不敵な不敬な問いではあるが、ここは、信仰が、宗門が、新たな世紀にどれだけ人の心を静かにさせ、安心させ、死の動揺から救い出せるかの微妙な難所にはかならない。法然親鸞に問うことではない。現代人である現に宗門の師である方や、菩提寺のご住職にわたしは問うてみたい、極楽や地獄を信じていますかと。人間が人間として生き、人間として死んで行く上に、ぜひ必要な地獄極楽ですかと。

「死後は、在るか——」

「神仏は、必要か——」

この二つの本質的な質問は、「よく生きる」ためにぜひ必要だと思う。ちなみに若い優れた知能の学生たちに唐突にこれを問ひ掛け、ぜひ答えてと強いると、おおかたはこう答えて来る。「死後は、無い。在るように思つて生きることが大切です」と。また「神仏の有無は考えなくてよい。よく生きるために神仏は必要とするのが、人間の智慧でしょう」と。この程度にも率直で端的な、自在な説法をすら、なかなか昨今の宗教者から聴くことができない。現代の言葉、未来へ繋ぎうる生き生きとした新しい言葉で如来や祖師の思いが表現されなくてはならないのに、いまだに鎌倉時代や江戸時代の人の言葉で「建て前」の安心が説かれたり「仏教学」が説かれるだけでは、寂しいではないか。

はだ こうへい

昭和10年、京都市生まれ。同志社大学美学芸術学科卒。昭和44年小説「清経入水」で第6回太宰治賞受賞。平成3年東京工業大学教授。平成8年同退職。現在、日本ペンクラブ理事、日本文藝家協会会員。著書に「みこもりの湖（つみこ）」、「冬祭り」、「京都感嘆」、「嵐山」、「死なれて・死なせて」、「親指のマリア」など、エッセイ、評論集、小説多数。すべてを「秦恒平・湖の本」に収め、継続刊行中。

FORUM
浄土の広場

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウオッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

晩夏

誌上俳壇

下町の滅法旨き心太

石仏の大き耳たぶ蟬しぐれ

打水や地中で眠れガラス塚

磯辺揚げゴッホの耳で聴けよ潮騒

看板に鯉のはねたる秋日かな

バターから銀紙剥がし日雷

兒玉仁良（入間市）

近藤十四郎（文京区）

長谷川 裕（目黒区）

噴水の頂点壊れ昨日の嘘

未成年雷魚が街に降りてくる

大畑 等 (船橋市)

夏草が不意に匂って鉄線路

遠雷や解き終われない流水算

芦名宗一 (会津若松市)

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

〒615 京都市右京区

西京極郡町一〇三番地三

(株)島津法衣佛具店

☎〇七五―三一四―七七六八
FAX 〇七五―三一五―三七五三

真壁保育園 園児の句集から

茨城県真壁町の真壁保育園では、長谷川君子園長先生によって、平成四年より毎年園児の俳句をまとめて『はいく』を発刊されている。

四歳児

ゆきふつてみずたまもようのまどのそと

五十嵐美緒

めがでたぞつちのなかからみどりいろ

柴山弥生

はやおきはわたしのまけねあさがおさん

仁保愛理

五歳児

どんぐりはぼうしがとれたさむいかな

伊東美奈

いいこえでみんなであったあきのうた

飯村美由紀

にんじんさんしたがとんがりきつねがお

稲田亜美

おほしさまよるのおそらにぴっかぴか

岡田卓也

みずうみにうつっているよおつきさま

渡辺明恵

ぞうきんはキュキュふくよかわいそう

渡辺みずほ

こおりとけまたまたみずにへんしんだ

大山彩香

「はいく」 第七号より抜粋

ぱずる

☆まちがいは7ヶ所あります。



まちがいをさがし

答えは53ページにあります。

●訂正とお詫び

「8月号」家島万里子氏の「生かされて生きる」の文中に、誤植がありましたので、ここに訂正しお詫び申し上げます。

11ページ6行目

現行一致→言行一致

14ページ二つ目の歌

無量寿経→無量寿仏

●新規会員紹介

購読会員

長崎 長崎組 摂取院

東京 葛飾区 真野一雄

東京 足立区 原 敏子

神奈川 高座組 西光寺

和歌山 和歌山組 地藏寺

敬称略



『とっておきの汽車旅』読者プレゼント!!

今年の本誌の表紙はいかがでしょうか。

表紙の写真を提供していただいている川井聡氏の編・著・撮影による『とっておきの汽車旅』（昭文社・刊 定価1524円+税）が発売されました。列車の旅ならではの映像・旅情にあふれた一冊です。

この本を『浄土』の読者に3冊プレゼントいたします。表紙の写真の感想をお書き添えの上、下記までハガキにてご応募下さい。

あて先▼〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内『月刊浄土』編集部読者プレゼント係



編集

後記

滝壺の白きしぶきに桐一葉

岱潤

八月の初めに甲子園球場で行われた伝統の阪神巨人戦は、野球自体よりも乱闘が話題となる大変な試合であった。

ガルベス投手の審判にボールを投げつけるという考えもつかない暴挙が第一戦で起き、第三戦では阪神吉田投手の高橋選手に対する死球から巨人のコーチの暴行、その裏の回では巨人横原投手の矢野選手への死球から阪神コーチの暴行と前代未聞の荒れた試合となり、試合終了後両軍連名の謝罪文が出るまでになった。

しかしもっと驚いたのは、翌々日の試合に巨人の長島監督が丸坊主姿で現れたことだった。新聞各紙はその日の勝利をその頭に奮起したためだとして、絶賛した。

悪いことをしたときに反省のこころを表すために髪を切ることは、昔から常套手段であるかもしれないが、髪を切る、あるいは落とすということは、遊女が昔自分の思いが一途であることを示すために髪を切ったり、出家をして僧侶となるときに髪を落としたり、刑務所に入ると髪を落とされたりということがあったわけだ。どうもこの最後の例を引いて、反省の念を髪を切ることで外部に表そうということだろうか、こんな典型的なことを余りにも有名な人が、目立つようにすると、髪を切っている人はみんなそうなのかなあと思われやしないか、私などははらしてしよう。

髪などというものは、大阪の漫才師のように、好きて切るといふほうがずつといふ。髪を切っても今や反省のあかしにはならないだろう。

(岱潤)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

村田洋一

石上俊教

佐山哲郎

間川彰道

編集顧問

大室了暗

浄土

六十四巻九月号 頒価六百元
年会費六千円昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷 平成十年八月二十五日
発行 平成十年九月一日

発行人 真野龍海

編集人 宮林昭彦

印刷所 株式会社 シー・エー・イー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四一七一四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三六

振替 〇〇一八〇八八二一八七

Cima, Cima.



ここにニッサンの最高があります。新しいシーマ

シーマがあることで、あなたの生活にどんな感動と満足が生まれるだろうか。私たちは今、大きな自信を持って話せます。技術を注ぎ、性能に妥協せず、あらゆる状況で、「これぞシーマ」の乗り心地を楽しんでいただけると。あなたがクルマに理想として求めてきたことが、こんどのシーマに実現できた。すみずみまで「ニッサンの最高」にふさわしい仕上り。風格と躍動感。ひとたび走り始めれば、そこにはもっと深い歓びが待っています。シーマ/シーマノあなたの熱い賞賛の声が聞こえそうです。日本車初。全車、SRSサイドエアバッグ標準装備。運転席・助手席に装着。側面衝突時の胸部に加わる衝撃を緩和します。大きく進化した4.1ℓ V8エンジン搭載。シーマのために開発。優越感あふれるスペックが、滑らかに力強い加速を生みます。



Photo: シーマ 411V ボディカラー: ダークブルー・イッシュブラックアウター(PI) (※4S9-特別塗装色) 本革シートはメーカーオプション ●全長4970×全幅1820×全高1445(mm) ●エンジンV8 4130cc TWINCAM ●最高出力270ps/5600rpm(6000min) ●最大トルク38.4kgm/4000rpm ●運転席・助手席SRSサイドエアバッグ ●デュアルエアバッグ(運転席・助手席SRSエアバッグ) ●ABS(アンチロックブレーキシステム) ●V-TCS ●AVシステム(TV機能付) ●運転席オートドライビングポジションシート ※一部車種に搭載。シーマのお求めは、お近くのローレル・スカイライン各販売会社へ。

スピードおさえて、いい運転。
シートベルトをしめましょう。

LIFE TOGETHER
NISSAN

人間のやさしさをクルマに。



これが、
ビヤホールの喉ごし。



ビヤホールの喉ごし

サッポロ生
黒ラベル



ビールは、20歳になってから。あきかんはリサイクルへ。①
●ご協力のお願いく自動販売機による酒類の販売は午後11時から午前5時まで停止されています。 サッポロビール株式会社